

Title	土族・東郷族の「逃走型赤ずきん」の類話
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 14 p.117-p.134
Issue Date	1996-02-29
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79690
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

土族・東郷族の「逃走型赤ずきん」の類話

角 道 正 佳

Versions of Little Red Riding Hood in Tuzu and Dongxiangzu

KAKUDO Masayoshi

0. はじめに

ヨーロッパの「赤ずきん」には悲劇型、復活型、逃走型の三つの大きな異話があり、逃避型は日本の「天道さん金の鎖」「三枚の護符」、台湾の「虎姑婆」と極めて類似していることが指摘されている。中国青海省の土族および甘粛省の東郷族にも類話が存在する。土族・東郷族の話がどういう共通点、相違点があるかを他の話と比較しながら検討する。(1)

1. ヨーロッパの「赤ずきん」

橋本(1994)はヨーロッパの三つの「赤ずきん」の普遍的な要素を、主人公の少女には名前がないこと、祖母を訪問する途中で会うのが狼であること、針の道とピンの道について聞かれること、先回りした狼が祖母を食べ残った肉を少女にも食べさせようとする事、結局少女は肉を食べ決定的な対話の後自身も食べられてしまうこと(p.97)と規定し、それ以外は地方的な特徴、あるいは変形であり、「おばあさんの話」(逃走型)はペローに先行する口承の代表というよりも、様々な点でかなり特異な話といえることができるだろうと結論づけている。

2. 「おばあさんの話」

「逃走型赤ずきん」の例としてドゥラリュの「おばあさんの話」をダンデス編(1994:22-24)から引用する。

あるときひとりの女がパンを焼いて、自分の娘にこう言いました。「このほかほかのパンと、ミルクの瓶を持って、おばあさんのところへ行っておいで。」

娘は出かけると、四つ辻でブズー(狼人間)に会いました。

ブズーは、

「どちらにお出かけだい。」と聞きます。

「おばあさんに、ほかほかのパンとミルクの瓶を届けに行くところなの。」

「どっちの道を行くんだい。縫い針の道かい、それとも留め針の道かい。」とブズーが聞きました。

「縫い針の道よ。」娘が答えます。

「それじゃあ、俺は留め針の道の方を行こう。」

娘は針を拾って楽しみながら行きました。一方ブズーはといえば、娘のおばあさんの家に辿り着き、おばあさんを殺してその肉を食料庫に入れ、血は瓶に詰めて戸棚にしまいました。娘が到着し、ドアを叩きました。

「ドアを押してごらん。」とブズーが言います。「濡れた藁一本で閉めてあるだけだから。」

「こんにちは、おばあちゃん。ほかほかのパンとミルクを一瓶持って来たの。」

「食料庫に入れておいておくれ。おまえはそこにあるお肉をお食べ。それから戸棚に置いてあるワインを飲めばいい。」

娘が食べていると、小さな猫がこう言いました。「自分のおばあちゃんの肉を食らい、血を飲んでしまうなんて、なんと馬鹿な娘なこと！」

「着物をお脱ぎ。」とブズーが言います。「そして、こちらに来てそばでお休み。」

「エプロンはどこにおけばいいの。」

「火にくべておしまい。そんなものはもう必要ないのさ。」

娘が他の着物、ベストやワンピース、スカートや靴下はどうしたらよいかと訊ねると狼はこう答えました。

「火にくべておしまい。そんなものはもう必要ないのさ。」

「あらまあ、おばあちゃん、なんて毛深いの！」

「だから暖かくしていただけるのさ。」

「あらまあ、おばあちゃん、なんて長いお爪をしているの！」

「長いと体を搔くのには便利だからね。」

「おばあちゃん、まあなんて肩幅の広いこと！」

「そのほうが焚き木を森から運ぶのに都合がいいからね。」

「おばあちゃんたら、なんて大きなお耳をしているんでしょう！」

「そのほうがよく聞こえるからね。」

「おばあちゃん、なんて大きなお口なの！」

「そのほうがお前を食べるのに便利だからさ！」

「あら大変、おばあちゃん、私お外に出てお手洗いに行かなくっちゃ。」

「そんならベッドの中でおしよ。」

「だめよ、おばあちゃん。お外に行かなくっちゃ。」

「それならわかった。でも長居は禁物だよ。」

ブズーは毛糸を娘の足に結び付け、娘を外に行かせました。娘は外に出ると毛糸を畑の大きな

すももの木に結びつけました。ブズーは待ちきれなくなてこう言いました。

「大きい方でもしているのかい？」

誰も答えないのに気が付きベッドから飛び上がって見てみると、娘はとっくに逃げてしまった後でした。追いかけてみたものの、家の前に着いたそのとたん、娘は無事に家の中に滑り込んでしまいました。

3. 日本の「天道さん金の鎖」

ダンデス編（1994:319）はその筋を次のように紹介している。

鬼が働きに出ていた母親を食べてしまう。鬼は子供たちの待っている家へやって来て母親になりすまして侵入しようとする。子供たちは怪しんで、手を見せろと言い、荒れた手なので入れてやらない。鬼は芋の葉で手をこすった後で戻ってくるが、今度は声がしゃがれているといって入れて貰えない。鬼は油を飲んで戻ってきて、迎え入れられる。床についた後、鬼は赤ん坊を食べ、眼を覚まして空腹を訴えた子供にその指を食べさせる。子供たちは母親でないことに気づき、外の手洗いに行きたいと言う。鬼は子供たちに縄を結わえつけて行かせてやる。子供たちは縄を解き、手洗いの柱に結びつけて逃げる。鬼は気づいて追い始める。子供たちは木に登る。鬼は木の登り方を尋ねるが、間違ったやり方を教えられたりしてなかなか登れない。子供たちは天の神様に縄を降ろして下さるように祈り、叶えられる。鬼も同じように祈るが、灰の縄だったので途中で切れ、地面に落ちて死ぬ。子供たちも地面へ降りて来て、死んだ鬼の腹を切り裂いて母親を救い出す。

関（昭和53:226-250）にはこの類話が90話紹介されているが、それによると、結末は必ずしも上のおりではなく、子供たちが天に登って太陽や月や星になる話もあれば、鬼が落ちてきてすすきに刺さり、そのため今でもすすきの茎が赤いという伝説が付け加わった話もある。

4. 台湾の「虎姑婆」

エバハード⁽²⁾が台湾の台北市古亭区の100家族から採録した241話の中核的な語りをダンデス編（1994:73）より引用する。数字はその語りが何パーセントあったかを表す。

ある母親（81％）には、同性の子供（78％）がふたりいた。彼女は、子供を家に残して、親戚に会いに行く（39％）。大伯母の姿に変装した虎が、その家に入ってくる（33％）。夜の間に、その虎は子供をひとり食べる（84％）。生き残っている子供は、虎が何かをかんでいる物音を聞きつけ（78％）、子供は虎からピーナッツが貰えるであろうと思う（50％）しかし、実際には兄弟か姉妹の指を与えられる（54％）。生き残っている子供は、年長であるが（59％）、トイレに行かなければならないふりをする（39％）。鬼は子供が逃げ出すのを恐れて、その子供を紐でしばる（37％）。ところが、子供はその紐をほどき、他の物体に結わえ（34％）、逃げて木に登る（47％）。虎はしばらくしてから子供を探しに出てきて、その子供を発見する（53％）。それか

ら、虎は子供に木から降りるようにと言う（41%）。子供は虎に沸騰している液体を入れた薬缶をもって来てほしいと要求し（35%）、虎に口を開けるようにいい（38%）、虎の口にその液体を注いで、虎を殺害する（59%）

5. 甘肅省・青海省の類話

類話が7話あるが、そのうちあまり長くも短くもないもので典型的なものを1話、東郷族の話（Тодаева(1961:78-80)）から全訳したものを記す。

マウスメゲチ（マンガス）

昔、あるおばあさんの家に四人の娘がいました。長女はダジェといいました。次女はエルジェといいました。三女はサンジェといいました。四女はスジェといいました。このダジェを嫁にやりました。

ある日、おばあさんが気づくと、ダジェの赤ん坊が生まれていました。おばあさんはお菓子を作って一瓶の蜂蜜を持って、一月泊まってくると言って出かけました。おばあさんは、出かける前に娘たちに注意しておきました。

「私が帰って来るまで、誰が来てもお前たちは入口を開けてはいけませんよ。」そう言って、おばあさんは出かけました。

途中で一人の人に会いました。それはマンガスでした。

「おばあさん、どこへ行くんですか。」と尋ねました。おばあさんが、

「娘が女の子を産んだので、お産のようすを見に行くんです。」と答えると、マンガスは、

「私も親戚の者です。私も行くところです。いっしょに行きましょう。」と言いました。途中でマンガスは、

「私は腹がへって動けません。そのお菓子をください。」と言いました。おばあさんが荷物を降ろすと、マンガスは荷物もロバも食べてしまいました。おばあさんはそれを見て恐くなりましたが、逃げられませんでした。また少し行くと、マンガスは、

「おばあさん、蜂蜜を食べさせてください。」と言いました。マンガスは蜂蜜を食べるとき、鍋もいっしょに食べてしまいました。また少し行くと、マンガスは、

「おばあさん、後ろをちょっと見てください。」と言いました。おばあさんが後ろを振り返ると、マンガスはおばあさんを殴り倒しました。そしておばあさんを食べてしまいました。夜になってマンガスはおばあさんの服を着て、おばあさんの家の入口の所へ行って、

「お母さんが帰って来たよ。入口を開けてちょうだい。」と叫びました。

「お母さんではありません。お母さんは赤い袖の服を着ています。」と娘が言いました。すると、マンガスは走って赤い砂の所へ行き、転がってまたやって来て、

「サンジェちゃん、入口を開けてちょうだい。」と叫びました。サンジェは、

「お母さんではありません。お母さんは緑の服を着ています。」と言いました。するとマンガ

スはまた走って、緑の草の中へ行き、転がって、また走って来て、

「スジェちゃん、入口を開けてちょうだい。」と叫びました。スジェはお母さんかどうかわからず、入口を開けて入らせました。マンガスは入って来てエルジェに、

「毛糸の玉を巻きに行きなさい。」と言ひ、サンジェに、

「水を沸かしに行きなさい。」と言ひました。

夜になりました。娘たちは恐かったけれども逃げられませんでした。マンガスは、

「スジェちゃん、お母さんのそばに来てお休み。」と言ひました。エルジェとサンジェは地面で寝ました。

マンガスはスジェを食べてしまいました。エルジェとサンジェは、マンガスが血を吸うのに気づいて、

「お母さん、何を飲んだんですか。」と尋ねました。マンガスは、

「お前が沸かしてくれたお茶だということがわからないの。」と答えました。

すると、スジェの頭が地面に転がり落ちました。エルジェとサンジェはまた、

「お母さん、何を転がしたんですか。」と尋ねました。マンガスは、

「お前が巻いてくれた毛糸の玉だということがわからないの。」と答えました。エルジェとサンジェは、

「お母さん、おしっこに行きたいの。」と言ひました。マンガスは、

「行ってきなさい。」と言ひました。マンガスはこの娘たちの帯を結び、二人の手を縛り、もう一方の先を自分がつかみ、出て行かせました。

娘たちは手の縄を解いて、その縄を、おんどりと水の入った急須に結びつけました。そして二人は逃げて行きました。

逃げて行くと、ある川の岸に来ました。川は大きくて渡れませんでした。娘たちは、

「川よ、川よ、小さくなって、孤児の命を救っておくれ。」と言ひました。すると、川は小さくなりました。二人は渡って行って、また、

「川よ、川よ、大きくなって、孤児の命を救っておくれ。」と言ひました。すると、川は大きくなりました。しばらく行くと、高い白楊（ハクヨウ）の木がありました。娘たちが、

「木よ、木よ、低くなって、孤児の命を救っておくれ。」と言うと、木は低くなりました。二人は木に登って、また、

「木よ、木よ、高くなって、孤児の命を救っておくれ。」と言ひました。すると、木は高くなり、天の半分まで届きました。

二人がおしっこをしに行くと行って出て行ってから、長い時がたちました。マンガスが帯を引っ張ると、おんどりが「コケコッコー」と鳴き、急須の水が「ゴボゴボ」と音をたてました。マンガスは、

「早く帰っておいで、笑い声が聞こえたけれど、何？」と言ひました。

いくら待っても彼女たちが帰って来ないので、マンガスは待てなくなって、降りて行きました。すると、そこにはおんどりと水の入った急須がありました。マンガスは腹を立て、我慢できなくなっておんどりを食べてしまいました。マンガスは川岸に行き、水の上を渡りました。木の根元のところに行くと娘たちがいました。マンガスが、

「お前たち、どうやってこの木に登ったの？」と言ったので、娘たちは、

「頭の上に敷石をのせて、棒にもたれて登ったんです。」と答えました。

マンガスはあちこちから棒を探してきました。敷石も探してきました。しかし、少ししか登れませんでした。マンガスはまた、

「お前たちはどうやって登ったの？」と尋ねました。エルジェが、

「私たちがロープを握っていますから、自分の体に結びつけてください。引っ張り上げてあげます。」と言いました。マンガスがロープを自分の体に結びつけると、マンガスは犬になりました。犬はちょっと吠えて木をかじりました。そこへ行商人がやって来ました。娘たちは、

「行商人さん、行商人さん、この犬を殺してください。お嫁さんがいなければ、あなたのお嫁さんになってあげますから。娘さんがいなければ、あなたの娘さんになってあげますから。」と言いました。行商人は、犬に石を投げて殺し、この娘たちを降ろし、家へ連れて帰りました。そして、行商人とエルジェは夫婦になりました。サンジェも嫁に行きました。

6. 土族・東郷族の類話

土族には4話、東郷族には3話がある。

土族

A : Schröder, Dominik (1959) *Aus der Volksdichtung der Monguor*, Teil 1, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, magudžë megän, 土族語 : pp. 88—90 (ドイツ語訳 : pp.89—93) インフォーマント : Guänbo-sdzia (1903年生)、収録 : 1948—1949年

B : 清格爾泰等編 (1986) 『蒙古語族語言方言研究叢書 015 土族語話語材料』内蒙古人民出版社 二. 土族民間故事 2. ゴンシとサーグ (罐子和壇子)、土族語、漢語訳、モンゴル語逐語訳 pp.204—232

C : 中国民間文藝研究会青海省分会編 (1985) 『土族民間故事選』中国民間文藝出版社「蟒古斯」漢語 pp.86—97 講述 : 李万寿、整理 : 李克郁、席元麟、流伝地区 : 互助東山

D : 朱剛、席元麟、星全成、馬学義、馬路、盾集辯編 (1992) 『中国少数民族民間文学叢書・故事大系 土族族撤拉族民間故事選』上海文藝出版社「智除蟒古斯」漢語 pp.72—86 流伝地区 : 青海互助、大通等県土族聚居地区、講述 : 吉然索 (67歳 土族)、搜集整理 : 李克郁、席元麟、孔様録、馬光星 搜集時間 : 1979年

東郷族

E : Тодаева (1961) Дунсянский язык, академия наук СССР, Институт народов

азии, Издательство 《наука》, Москва, 2. маусумэсэчы 東郷語: pp.78-80 (ロシア語訳: pp.80-83)、インフォーマント Ma Sao-chen 24歳 教師

F: 布和等編 (1986) 『蒙古語族語言方言研究叢書 009 東郷語話語材料』内蒙古人民出版社 民間故事和伝説 10. 妖婆 東郷語、漢語訳、モンゴル語逐語訳 pp.215-230 馬騰林 講述 龍泉公社社員 (四甲集)

G: 郝蘇民編 (1987) 『中国少数民族民間文学叢書・故事大系 東郷族保安裕固族民間故事選』上海文藝出版社「三姐妹除妖」漢語 pp.40-47 搜集整理: 馬自様

以上の7話はマンガスの着ている服 (あるいは顔) が娘たちの母親のとは違うというモチーフがあるものを選び出したものであり、話の筋も題も様々である。仮にマンガスが登場する話から選び出すとすれば、本論の目的とはかなり違った話を取り上げることになってしまう⁽³⁾。以上の7話のうちAとGは他の話とはかなり違っており、中核的な語りはB, C, D, E, Fのものである。

Aは土族語互助方言のうちのハルチゴル方言とナリンゴル方言の中間の方言の話者から収録したものをフィノ・ウゴル協会の表記で記してある。

Bは話者は不明であるが、土族語互助方言の東溝方言 (標準語) をIPAで記したものである。

CとDはインフォーマントが違うのにもかかわらず、整理したものを漢語訳したものであり、ごく微妙な表現の差異を除いて基本的には同一のものである。一部は散文、一部は韻文に訳されている。

Eは東郷語の鎖南坝の話者の話をキリル文字で表記したものであり、収録時期は1950年代の後半である。

FはEの鎖南坝より約50キロ北北東の四甲集の話者の話をIPAで記してある。

B, Fはそれぞれ土族語、東郷語のテキストとともに漢訳およびモンゴル語の逐語訳が付いている。しかしモンゴル語は対応する語があればそれを、なければ最も近い意味の語を並べてあるのみであり全体としてはモンゴル語の文になっていない。

Gは漢語訳である。

7. 土族・東郷族の類話の分析

7. 1. 最初の登場人物

最初の登場人物は母親 (お婆さんあるいは若い未亡人) と娘たちである。娘の数がバージョンによって様々である。「虎姑婆」でも子供の数は様々であるが、たいていは2人となっている (ダンデス編 (1994:38))。「天道さん金の鎖」ではたいてい3人となっている。「天道さん金の鎖」にも東郷族の話にも7人というのがあるが、「狼と七匹の子やぎ」の数と一致する。娘たちの名前が付いている場合がある。また登場人物の年齢が記されている場合がある。各バージョンでどうなっているか記すと次のようである。

A：お婆さん、三人娘、B：お婆さん、三人娘（ゴンシ、サーグ、スズル）、C、D：お婆さん（77歳）、四人娘（塔英索、吉然索、達蘭索、娜英索）、E：お婆さん、四人娘（ダジェ、エルジェ、サンジェ、スジェ）、F：お婆さん、七人娘（長女、次女の名は不明、三姐、四姐、五姐、六姐、七姐）、G：若い未亡人、三人娘（長女（14歳）、二女（12歳）、三女（9歳））

土族・東郷族の話では「虎姑婆」「天道さん金の鎖」と違って必ず娘たちが登場し男の子が登場することはない。娘たちの名前のうちBのゴンシは漢語で「罐子」であり瓶、缶、桶、つるべなど広く円筒形の容器を指し、サーグは漢語で「壇子」であり酒、酢、醬油を入れるやや小さめの瓶を指し、スズルは漢語で「壺壺」であり茶、酒を入れる取っ手と口の付いた器を意味する。C、Dの塔英索、吉然索、達蘭索、娜英索はそれぞれ50、60、70、80に女性の名前に用いられる「索」を付けた土族語である。Eのダジェ、エルジェ、サンジェ、スジェはそれぞれ大姐、二姐、三姐、四姐という漢語である⁽⁴⁾。Fでも長女と次女の名前は話の中には出て来ないが残りの娘は三姐、四姐、五姐、六姐、七姐という名前である。

「虎姑婆」の子どもたちには名前が付いていないようである。エバハードによると、中国人の母親が自分の子供に語りかける時は、子供の正式な名前を使わないのが普通である。従って、見知らぬ人が他人の話を漏れ聞いても、子供ひとりひとりの名前を知ることとはありえない（ダンデス編（1994:46））。「天道さん金の鎖」では忠吉、三吉、孫吉という広島県安佐郡の例以外には、太郎、次郎、三郎とか一郎、次郎、三郎のような中立的な名前が付いている。名前が付いている場合はすべて男の子である。土族・東郷族の話で子供がすべて女の子であるというのと対称的である。

母親はほとんどの場合お婆さんであるが、Gだけ若い未亡人となっている。父親（お爺さん）はAにだけ登場するが、役割はない。Fでは父親が話には登場するが、すでに亡くなっている。

C、D、Eでは長女が、Fでは長女と次女がすでに嫁いでいる。結局Fを除いてマンガスがやって来たとき家にいる娘の数は3人（または5人）である。この点「天道さん金の鎖」に最も近い。このうち末っ子がマンガスに食べられ、残りの2人が逃げるというのが中核的な語りである。娘の数が多いと、話が展開するときにある者は嫁いでいなければならない。またマンガスが末っ子を食べるためには、他の娘に仕事を言いつけなければならない。

7. 2. お婆さんは何をしに外出するか、外出の期間、行き先はどんな所か

話は母親が外出するところから始まる。外出の目的は嫁いでいる娘がいる場合といない場合で違ってくる。

A：薪を探しに、B：実家へおじに会いに、二日、C、D：長女の嫁ぎ先へ孫を見に、山の向こう側へ、E：長女の嫁ぎ先へ赤ん坊を見に、一月、F：次女の嫁ぎ先、G：実家へ、三日、九つの山、九つの坂、九つの谷を越えて

Gでは次女と三女がついて行きたがるが、母親は連れて行かない。

7. 3. お婆さんは何を土産に持っていくか

ヨーロッパの「赤ずきん」では赤ずきんがお婆さんのところへ持って行くものが描写されているのが普通であるが、「虎姑婆」「天道さん金の鎖」では外出の目的が訪問とは限らないから土産の描写はないようである。人民中国編集部（昭和48：162-172）の台湾の「とらのおばあさん」では母親は娘たちがおばあさんにつくってあげた着物を持って出かけている（p.163）。東郷族の話でだけ土産が語られている。

E：お菓子、一壺の蜂蜜、F：饅頭、肉、鶏、G：油香（＝油餅）、鶏

7. 4. お婆さんは途中で誰に会うか

A：マンガス婆さん、B：白髪のお婆さん、C、D：一人のばさばさの白髪のお婆さん、実は人食いマンガス、E：マンガス、F：マンガス婆さん（お婆さんのふりをしている）、G：黒い服を着た老婆

「天道さん金の鎖」では外出中の他に、誕生祝いの加勢に行き帰るとか臼摺りの手伝いに行った帰りといったように何かの帰りに鬼などに出くわす話があるが、土族・東郷族の話では母親がどこかへ行く途中にマンガスに出くわす。

7. 5. お婆さんはマンガスに住みかを教えるか

Aだけお婆さんはマンガスに住かを教えている。

A：赤い崖の麓

7. 6. マングスは何と言ってお婆さんを安心させるか

マンガスがお婆さんを安心させる場面がEにだけ現れる。

E：私も親戚の者です

7. 7. マングスはお婆さんに休憩を促すか

B：急がないで。日はまだ高いです。ここでちょっと休憩しましょう。

7. 8. マングスはお婆さんに何を尋ねるか

A：家はどこか、子供はいないのか、B、F：家に誰がいるか、名前は、G：（お婆さんが家のようすをしゃべってしまう）

C、D、Eには娘たちの名前を尋ねる場面はない。

7. 9. お婆さんはマンガスに何を依頼するか

マンガスに食われそうになった母親は次のように依頼する。

A：血を吸わないでください、私が衰弱して死ぬまで待ってください、C，D：孫に会わせてください、明日私を食べてください

7. 10. マンガスは何を食べるか

A，C，D，G：お婆さん、B：お婆さんの命も奪ってしまった、E：お菓子、ロバ、蜂蜜、鍋、お婆さん、F：饅頭、ロバ、お婆さんを咬み殺して肉を少し食べた

Bではマンガスはお婆さんの命を奪ったと描写されているが、食べてしまったかどうかははっきりしない。Fではお婆さんの肉を少し食べたことになっている。後に娘たちが母親を埋葬する。母親を食べてしまわなくても、直接話の進行に影響しない。エバハードによると、「虎姑婆」では母の座にあたる者は虎に母親を食べさせる語りはしない（ダンデス編（1994:43））。

7. 11. マンガスはどうやってお婆さんを食べるか

B，F，G：虱、C：地面に倒す、E：後ろを振り返らせる

マンガスがお婆さんの頭の虱を取ろうとするモチーフがB，F，Gにある。直接は関係がないかもしれないが、ヘッセン州の「狼と七匹の子やぎ」には母親が娘の虱をとってやるモチーフがある（日本民話の会編（昭和63:42））。

7. 12. マンガスが娘の家を訪問するときの扮装

C，D：老婆、E，F：お婆さんの服を着る

7. 13. マンガスは娘たちの名前を呼ぶか

マンガスは娘たちの家へやって来て名前を呼ぶことが多い。

B：ゴンシ、サーグ、スズル、C，D：吉然索、達蘭索、娜英索（名前を尋ねていないのに知っている）、E：サンジェ、スジェ、F：三女、四女、五女、六女、七女

C，Dではマンガスはお婆さんに娘たちの名前を尋ねていないのに知っている。

7. 14. 母親との違いを示す色

マンガスが娘たちの家へやって来て、中に入ろうとするが服（や顔）の色が違うので入れてもらえない。娘たちがマンガスに伝える母の服（や顔）の色は次のとおりである。

A：長女：緑の顔、次女：黄色の顔、三女：赤い服、B：ゴンシ：赤いスカート、サーグ：黒いスカート、スズル：白いスカート、C，D：吉然索：紅のスカート、達蘭索：緑のスカート、娜英索：花（斑の）スカート、E：エルジェ：赤い袖の服、サンジェ：緑の袖の服、F：三女：赤い袖、四女：緑の袖、五女：黒い袖、G：大女兒：黒いスカーフ、二女兒：緑の袴、三女兒：

褐色のズボン

このモチーフは土族・東郷族の話に共通のものであるが、よく読むと不思議なことがある。例えば、B, C, Dでは母親のスカートの色とマンガスの色が違うと言っておきながら、娘が変わるたびに母親のスカートの色が違っているのである。同じようにE, Fではスカートではなくて袖の色が違っている。娘たちは母親の服の色をいったい何色だったと思っていたのであろうか。漢語訳のGでは、長女は黒いスカーフ、二女は緑の袴、三女は褐色のズボンというように色の場所が違っているので矛盾は生じない。

「赤ずきん」にはこのモチーフは現れない。「天道さん金の鎖」でも色のモチーフは現れない。手や声が違うのである。このモチーフは「狼と七匹の子やぎ」と共通点がある。「虎姑婆」にも色のモチーフが現れる異話の存在が報告されている（ダンデス編（1994:45））。人民中国編集部（昭和48:162-172）に台湾の「とらのおばあさん」が紹介されていて色のモチーフが少し出てくる。この話の中で、最初に虎は左のほっぺにあざがないと言われ、次に足に緑の布を巻いていないと言われる（p.164）。

7. 15. マンガスが末っ子に渡そうとする物⁽⁵⁾

マンガスはなかなか家に入れてもらえないので、娘たちに何か渡そうとする。Aではマンガスが逆に娘たちにやられるし、Eでは四女（末っ子）が気がつかずに門を開けてしまうが、その他の話ではマンガスは何か物をあげようと嘘をつく。

B：指抜き、C, D：ナツメ、桃、杏、指輪、F：指輪、G：三つの銀の指輪

「虎姑婆」「天道さん金の鎖」にはこのモチーフはない。

7. 16. マンガスが娘たちに言いつける仕事

マンガスは娘たちの家に入った後、末っ子を食べようとしているので他の娘たちは邪魔になる。そこで何か用事を言いつける。このうちEの話は後で自分が末っ子の血を飲み、頭を転がしたときの音の言い訳になる。Fでは家に5人の娘がいるので二人ずつに用事を言いつけることになる。「虎姑婆」「天道さん金の鎖」にはこのモチーフはない。

B：食事を作らせる、E：エルジェ：毛糸の玉を巻かせる、サンジェ：水を沸かさせる、F：三女、四女：水汲み、五女、六女：炒麦を焼かせる

7. 17. 娘たちは母親を埋葬するか

マンガスが母親を食べてしまうという話が多いが、Fでは肉を少し食べたことになっている。

F：三女と四女が水を汲みに行くと、母が殺されて醜い布に包んで置いてあった。彼女たちは泣きながら母を洗って埋葬した。

7. 18. 寝る所

B：マンガス、末っ子：上の家、姉たち：太陽の家、E：四女（末っ子）：マンガスの側、次女、三女：地面、F：三女、四女、五女、六女：地面

Fでは三女、四女、五女、六女が寝るときは七女（末っ子）は既に食べられてしまっていて、マンガスにオンドルの上に寝に来るように言われたとき、「オンドルに寝ると五女の姑が来たとき見て笑う」と答えている。五女はまだ嫁いでいないのに、姑が来たときとなっているのは不可解である。

7. 19. マンガスの側で誰が寝るか

B, C, D, E：末っ子、G：長女

Bではマンガスがとくに末っ子を選んだのではなく、「誰か太った者は私の側に寝において。誰かおとなしい者は私の側に寝において。」と言うと幼稚な末っ子が側に行ったことになっている。Fでは姉たちが用事をしているうちに末っ子が食べられてしまったことになっている。Gでは他と違って長女がマンガスの側で寝る。しかし長女は賢いので食われずに妹たちを連れて逃げて行く。

「虎姑婆」の解説の中でエバハードは、祖母や母が子供のひとりかふたりとベッドをとともにするのはよくある。子供たちは誰かと一緒に寝ることを楽しんでいたり、訪ねてきた祖母や大伯母と一緒に寝ることを一種のもてなしと見做しているふしがあると記している（ダンデス編（1994:51））。

7. 20. マンガスが末っ子を食べたとき出した音の言い訳⁽⁶⁾

B：油炒麺、お茶、（指）、C, D：羊の頭の骨、羊のスープ、糸の塊、E：お茶、毛糸の玉

Eでは言い訳をするために前もって娘たちに用事を言いつけてある。Bでのみ娘たちにせがまれてマンガスは指を与える。「天道さん金の鎖」では音の言い訳を香々、漬物、味噌漬け、大根、菜漬け、一本漬けなどとしている。「虎姑婆」で子供たちがピーナツがもらえるだろうと思うのはいかにも中国的である。エバハードは若い世代がピーナツの返事を好んで語るのに対し、高齢者のほうはメロン（ママ、スイカのことか）の種や特に細長いものを選ぶ傾向が高かったと記している（ダンデス編（1994:55））。

7. 21. 娘たちがおしっこを外でする言い訳

土族の話にだけ言い訳する場面がある。

B：オンドルでするとおじさんに叱られる、オンドルの下にするとおばさんにしかられる、C, D：オンドルでするとおじさんに叱られる、教養がないと言われる。

「虎姑婆」では臭うからと言って虎の言うままにならない（ダンデス編（1994:57））。人民

中国編集部 (昭和48:162-172) 「とらおばあさん」では神のたたりがこわいので床 (とこ) や土間や戸口ではおしっこしない (p.168)。

7. 22. 娘たちは縄を何につないだか

B: ゴンシ: メスブタ、サーグ: メンドリ、C, D: 水壺、大きなメンドリ、E: オンドリ、水の入った急須、F: 一瓶の水、一羽のメンドリ、G: メンドリの股、

「天道さん金の鎖」では解いた縄は便所の柱、庭木、竹箒、便所の戸などにつなぐことになっている。1話だけ土龍 (もぐら) が持ってやるというのがある (鹿児島県沖永良部島)。土族・東郷族の話では音が出るものにつなぐという共通点があるが、人民中国編集部 (昭和48:162-172) の「とらのおばあさん」にも、水かめの上につるしチロチロ音がするので、まだおしっこをしているのだと思わせるという話がある (p.170)

7. 23. 娘たちが逃げて行くとき川と木があるか

B, C, D, E, F: 川、木、G: 木

土族・東郷族の話には川と木の両方が登場するものが多い。しかも川と木は離れている。「天道さん金の鎖」では池の側に木があって、木に登った子供の姿が池に映ったのを見つけるという話があるが、川は登場しない。川が登場する点では「三枚の護符」のほうに近い。

中国の「熊ばあさん」では庭の木、とくになつめの木に逃げ登る (日本民話の会編 (昭和63:151) が、「天道さん金の鎖」では単に木となっている以外に、松、えんずいは (ゆずりは)、柿、桃、公孫樹 (いちじく)、梨、くちなし、杉、梅など各種の木が登場する。

土族・東郷族の話で木の種類が記されているのは、E, Gの白楊 (はくよう、ヤマナラシ、ポプラ) だけである。

7. 24. 娘たちは木に登ろうとするマンガスに何を食べさせるか

マンガスにどうやって木に登ったか尋ねられた娘たちはでたらめを言い、次に述べるものを食べて登ったと答える。このモチーフは土族の話だけに出てくる。

B: 豚の糞、犬の糞、人の糞、C, D: 豚の糞、大きい糞、犬の糞、犬の尿

7. 25. マンガスが木に登ろうとするとき何を使わせるか

C, D: 縄を降ろす、E: 縄、敷石、棒、F: 縄、石臼、麵棒

「天道さん金の鎖」の話の中に、すすき、ほうれんそう、蕎麦が赤いのは鬼が落ちてきたためだというモチーフがある。鬼はすすきに刺されるわけであるが、Eの棒、Fの麵棒はすすきのモチーフと関係があるかもしれない。

7. 26. マンガスは何に変身するか

7. 24のモチーフとは違って、このモチーフは東郷族の話にだけ出てくる。Eではマンガスが自分の体にロープを結びつけたとき犬になったことになっているが、Fではマンガス婆さんが尻に麵棒を挟んでロープを引いてもらって登ろうとしたとき、娘たちがマンガスの足を蹴って落し、石をぶつけると麵棒がささって犬に変わったとなっている。

E：犬、F：斑の犬

7. 27. その他の登場物

犬に変わったマンガスが娘たちの登った木をかじっていると、カラスがやって来て、かじろうとするが木はいっそう太くなる。犬がまたかじろうとすると、トビがやって来てかじろうとするが、木はさらに太くなるという話がFにだけ現れる。

F：カラス、トビ

7. 28. 最後の登場人物⁽⁷⁾

B：柴刈の若者、C、D：柴刈の若者、樵夫（きこり）、E、F：行商人、G：大力士筋は違うが、行商人が登場する話が「虎姑婆」の異話の中にある。エバハードによると、何人かの行商人が次々と訪ねてきて、（母親に）どうして泣いているのかと尋ねる。どの行商人も自分の商品の一部を売ってくれる。この筋立てになっている5話の中にでてくる品物には、礮臼、蛇、針か糸、糞尿、鈴か鐘、網か縄がある。それらの品物が家に置かれるのは、虎がその家に来たとき、それでやっつけられるようにするためである（ダンデス編（1994:71））。この話は土族のもうひとつの「マンガス」（Schröder（1959:80-86）、（Тодаева（1973:236-239）、清格爾泰等編（1986:289-299）と同一のものであり、モチーフはダグール族の「紙人形姐さん」（拿木四来・哈勘爾敦（1983:595-605）、Тодаева（1986:89-96）、孟志東（1982:397-401））や日本の「猿蟹合戦」、グリムの「コルペス氏」「ブレーメンの音楽隊」などと通じるものである。

7. 29. マンガスをどうやって殺すか

A. 娘たちがマンガスを殺す、B, C, D. 柴刈りの若者がマンガスを斧で切って殺す、E. 行商人が犬に石を投げて殺す、F. 行商人が犬を川に突き落として殺す、F. マンガスを洞穴の中で焼き殺す

8. 土族・東郷族の異話の分析 (まとめ)

土族・東郷族の異話の異同を表にすると次のようになる。

	土族				東郷族		
	A	B	C	D	E	F	G
1. お爺さんが登場するか	+					-	
2. 娘たちの名前がついているか		+	+	+	+		
3. 長女は嫁いでいるか			+	+	+	+	
4. 娘たちはお婆さんといっしょに行きたがるか							+
5. お婆さんは外出のときに土産を持って行くか					+	+	+
6. マンガスはお婆さんに娘の名前を尋ねるか		+				+	
7. マンガスはお婆さんを安心させるか					+		
8. マンガスはお婆さんに休憩を促すか		+					
9. マンガスはお婆さんに虱を取らせるか		+				+	+
10. お婆さんはマンガスに命乞いをするか	+		+	+			
11. マンガスはお婆さんを食べてしまうか	+	?	+	+	+	-	+
12. マンガスはお婆さんの服を着るか			(+) (+)		+	+	
13. マンガスは娘たちの名前を呼ぶか		+	+	+	+	+	
14. マンガスの服 (顔) の色は母親のと違うか	+	+	+	+	+	+	+
15. マンガスは娘たちに何か渡そうとするか		+	+	+		+	
16. マンガスが娘たちに仕事を言いつけるか		+			+	+	
17. 娘たちは母親を埋葬するか						+	
18. 末っ子がマンガスの側で寝るか		+	+	+	+		
19. マンガスに末っ子が食べられるか		+	+	+	+	+	
20. マンガスは末っ子を食べたとき言い訳するか		+	+	+	+		
21. マンガスは娘たちに指を与えるか		+					
22. オンドルでおしっこをしない言い訳をするか		+	+	+			
23. ロープが登場するか		+	+	+	+	+	+
24. 娘たちが逃げるとき川が登場するか		+	+	+	+	+	
25. 娘たちが逃げるとき木が登場するか		+	+	+	+	+	+
26. マンガスは木に登るとき何か食べさせられるか		+	+	+			
27. 娘たちは縄を降ろすか			+	+			
28. マンガスは棒 (麵棒) を使うか					+	+	
29. マンガスは犬に変身するか					+	+	
30. 犬以外に動物が登場するか					+		
31. 娘たちを助ける人が登場するか		+	+	+	+	+	+
32. マンガスを埋葬するか		+	+	+	+	+	
33. 母を救出するか	+						

中核的な語り

すでに初めに述べたように、A～Gに共通なモチーフは14のみである。AとGは話が特殊なので残りのB, C, D, E, Fを比べると、土族に固有なモチーフは10,22,26,27、東郷族に固有なモチーフは5,28,29 であるといえる。31もさらに詳しく見ると、土族の話には柴刈りの若者あるいは木こりが登場するのに対し、東郷族の話には行商人が登場するという違いがある。

9. 「逃走型赤ずきん」の類話比較（総合型）

「逃走型赤ずきん」の類話を比較すると次のようになる。+はその異話のどれかにそのモチーフが現れるという意味である。「狼と七匹の子やぎ」を別にすると、全てに共通なのはトイレとロープである。(8)。

	ドイツ 「狼と七匹 の子やぎ」	ヨーロッパ 「赤頭巾」 (逃走型)	台湾 「虎姑婆」	日本 「天道さん 金の鎖」	日本 「三枚の 護符」	土族・東郷族 「マンガス」
虱	+		+			+
声	+		+	+		
手	+		+	+		
色			+			+
トイレ		+	+	+	+	+
ロープ		+	+	+	+	+
川		+			+	+
行商人			+			+
退治	+		+			+

10. 「赤ずきん」は何を語っているか

「赤ずきん」の解釈をめぐる、橋本（1994:75-76）は先行研究を次のように紹介している。「復活型」は祖母、母、娘という女性三代にわたる男性への復讐の話、日の入りと日の出、冬と春、「悲劇型」は子供に警告するための話、「逃走型」は若い農民の娘の自立を祝福するもの。

これに対し、「天道さん金の鎖」は、すすきの茎、ほうれんそう、薬麦の根が赤いわけ、あるいは、太陽と月の起源、「三枚の護符」はお礼の御利益を語っているといえる。「マンガス」は逃走もさることながら、退治することも重要な要素であり、民衆の封建領主の圧迫からの離脱を表しているといえよう。

註

- (1) 「赤ずきん」と「天道さん金の鎖」「三枚の護符」「虎姑婆」、土族・東郷族の話とでは、1. 子どもの数(赤ずきんは一人、その他の話では二人以上)、2. 子どもが外出するか、母親が外出するかという大きな違いがある。
- (2) Wolfram Eberhard. 大林太良(1995)はその紹介の中でヴォルフラム・エバーハルトと表記しているが、ダンス編(1994)ではヴォルフラム・エバハードと表記してあるのでこちらに従う。
- (3) Schröder(1959)にはマンガスの話が4話収録されている。第1話(80-86)はТодаева(1973:236-239)、清格爾泰等編(1986:289-299)と同一のものである。ここで扱っているのは第2話である。第4話には、マンガスの腹を切って牛を助け出し中に石を詰めるという「狼と七匹の子やぎ」と共通のモチーフがある。話の内容については角道(1991)を参照されたい。
Тодаева(1961:88-90)の「薪を探す人」にも7つの頭のある妖怪(yauguai)が登場する。この話は逃走型赤ずきんとは関係ないが、自分を殺すにはどうすればいいかを側の人に語るくだりがある。ケサル(あるいはゲセル)にも同様のモチーフがある(君島(1987:89-90)、若松(1993:104-105))。
- (4) 東郷語には漢語からの借用語が非常に多い。
- (5) 娘たちがなかなか門をあけてくれないので、C、Dでマンガスは、「阿媽的心在兒女上。兒女的心在石頭上」と言っている。これは土族の有名な諺であり、清格爾泰等編(1986:552)格言、諺和謎語の82にも「父母の心は息子と娘にある。息子と娘の心は石にある。」とある。
- (6) 音の言い訳としてケサル(あるいはゲセル)に次のような話がある。ケサルが悪魔退治をしようとしてやって来たときにたてた矢の音を、捕らえられていた第二夫人がする言い訳がチベットの『ケサル大王物語』第4章、悪魔退治には糸まきの音(君島(1987:95))、モンゴルの『ゲセル・ハーン物語』第四章、十二首魔王退治には、紡錘が鍋の中に落ちた音、天窓の紐を引っ張ったときに出了た音(若松(1993:110-111))、土族のGeser rēdzia-wuの10031行-10048行には、鍋を洗っていて腕輪が鍋の縁に当たった音、糸巻が地面に落ちた音(Heissing(1980))としている。
- (7) 「お嫁さんがいなければお嫁さんになってあげます。娘がいなければ娘になってあげます。」という表現は、B、C、D、E、Fに共通して現れる。一般に娘が青年に何か頼むときよく用いられる表現である。
土族の「黒馬」の話で黒馬の子にみつかった三人娘もほぼ同じことを言っている(Schröder(1959:104, 120行)、Тодаева(1973:286))。
一方、東郷族の「犬と猫」の話の中で、娘が「姉がいなければ姉になります。お嫁さんがいなければお嫁さんになってあげます。恐がってどうするんですか。」と言って少年を安心させる場面がある。(Тодаева(1959:302)、Тодаева(1961:97))。
- (8) 萩原(1995:111-112)に、投げた物が山、川や海、火などに変わって障害物となり、追手から逃れるという呪的逃走のモチーフのユカギル族の話「人喰い・二」が紹介されている。この話には人喰いが子供にシラミを取らせるくだりがある。

参考文献

- 布和等編(1986)『蒙古語族語言方言研究叢書 009 東郷語話語材料』内蒙古人民出版社
 孟志東(1982)『達斡爾族民間故事選』内蒙古人民出版社
 拿木四來・哈爾斯敦敦(1983)『達斡爾語与蒙古語比較』内蒙古人民出版社
 清格爾泰等編(1986)『蒙古語族語言方言研究叢書 015 土族語話語材料』内蒙古人民出版社
 郝蘇民編(1987)『中国少数民族民間文学叢書・故事大系 東郷族保安裕固族民間故事選』上海文藝出版社
 中国民間文藝研究会青海省分会編(1985)『土族民間故事選』中国民間文藝出版社
 朱剛、席元麟、星全成、馬学義、馬路、盾集辦編(1992)『中国少数民族民間文学叢書・故事大系 土族族撒拉族民間故事選』上海文藝出版社

- ダンデス、アラン編、池上嘉彦・山崎和怒・三宮郁子訳（1994）『「赤ずきん」の秘密 民俗学的アプローチ』紀伊國屋書店
- 萩原眞子（1995）『東北アジアの神話・伝説』東方書店
- 橋本嘉那子（1994）「三つの赤ずきん 先行研究の検証と類話の比較分析」『ドイツ文学語学研究』（学習院大学大学院ドイツ文学語学研究会）第18号 75-102
- 人民中国編集部編（昭和48）『中国の民話101選』第3巻 平凡社
- 角道正佳（1987）「ダグールの口承文芸」『朔風』（大阪外国語大学モンゴル語研究室）第2号 15-27
- 角道正佳（1991）「青海省・甘肅省のモンゴル系民族に伝えられているマンガスの話」『日本とモンゴル』（社団法人日本モンゴル協会）第26巻1号（1991年9月）（No.83）55-67
- 金成陽一（1993）『誰が「赤ずきん」を解放したか』大和書房（初版 1989年）
- 君島久子（1987）『世界の英雄伝説9 ケサル大王物語 幻の英雄伝』筑摩書房
- 大林太良（1995）「欧米の東洋学 17 ヴォルフラム・エーバーハルト」『しにか』 Vol.6, No.9（1995年9月）大修館書店 110-114
- 関 啓吾（昭和53年）『日本昔話大成』第6巻 角川書店
- 日本民話の会編（昭和63）『ガイドブック 世界の民話』講談社
- 若松 寛（1993）『ゲセル・ハーン物語 モンゴル英雄叙事詩』東洋文庫566 平凡社

- Heissig, Walther (1980) *Geser rēdzia-wu*, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tu-jen)-Version des Geser-Epos aus Amdo, Otto Harrassowitz, Wiesbaden
- Schröder, Dominik (1959) *Aus der Volksdichtung der Monguor*, Teil 1, Otto Harrassowitz, Wiesbaden
- Todaeva, B.H. (1959) 'Über die Sprache der Tung-hsiang,' *Acta Orientalia Hungaricae* 9, 273-310
- Тодаева, Б.Х. (1961) Дунсянский язык, академия наук СССР, Институт народов азии, Издательство «наука», Москва
- Тодаева, Б.Х. (1973) Монгорский язык, академия наук СССР, Институт народов азии, Издательство «наука», Москва
- Тодаева, Б.Х. (1989) Дагурский язык, академия наук СССР, Институт народов азии, Издательство «наука», Москва

(1995. 9. 14 受理)